

アメリカ児童文学にみる学校の「人種統合」

— ルビー・ブリッジズをめぐる2作品についての考察 —

末 木 淳 子

1. はじめに

2016年2月、ニューヨークタイムズに「学校の人種統合への秘策」と題したコラムが掲載された¹⁾。その中で筆者は、近年の学校における人種隔離の様相を嘆き「ある意味、まるでブラウン判決などなかったかのようだ」と記した。記事によれば、アメリカ北東部では、アフリカ系アメリカ人主体の学校に在籍するアフリカ系アメリカ人生徒の割合は1968年に比べて8.7%高くなっているとのことである。1954年のブラウン判決以来、紆余曲折を経ながらも進められてきた学校の「人種統合」²⁾だが、60年以上の年月を費やしてもいまだ達成には至っていない。それどころか、公民権運動が盛り上がりを見せた時期とそれに続く時代に比べると、むしろ後退していると言ってもよいであろう。

「人種統合」がその歩みを止めた時期に合わせるように、1990年代に入って、アメリカ児童文学の分野³⁾では学校における「人種統合」を扱った作品がみられるようになった。中でもピュリッツ賞作家ロバート・コウルズ (Robert Coles) によって文章が書かれ、1995年に出版された絵本 *The Story of Ruby Bridges*⁴⁾ (『ルビー・ブリッジズの物語』) は広く読み継がれている。この絵本では、1960年にルイジアナ州ニューオーリンズにおいて白人住人の反対の中で「人種統合」が強行された顛末が、6歳の少女ルビー・ブリッジズを主人公に、ノンフィクションの手法で描き出されている。ルビー・ブリッジズのストーリーは後にディズニー・プロダクションによってTV映画化されたこともあり、彼女は「人種統合」運動においてシンボリック的存在となっていた。2000年代になると、新たな視点からルビーを描く作品も現れた。ロバート・シェアノウ (Robert Sharenow) によるフィクション作品 *My Mother The Cheerleader*⁵⁾ (『私の母はチアリーダー』) は、ニューオーリンズに住む13歳の白人少女の目を通して1960年の「人種統合」騒動の一端を切り取ってみせ、彼女の目に映ったルビー・ブリッジズを描き出している。

本論では、この2作品について考察し、それぞれの作品において、ルビー・ブリッジズがいかに描かれているか、また彼女をめぐる騒動がどのように解釈されているかを比較対照する。そしてさらに、2作品の相違を生んだ社会的背景について考察を進めたいと思う。これらの作品をみる前に、まず「人種統合」への歩みを概観し、次に物語の舞台となったニューオーリンズにおいて「人種統合」が敢行されるに至った経緯と、当時のニューオーリンズの様子をみてみたい。

2. 作品の背景

2.1 「人種統合」への道のり

1865年に南北戦争に北軍が勝利し奴隷制度が廃止されると、結婚と移動の自由を得たアフリカ系アメリカ人は、自らの教会を組織しコミュニティの強化に取り組んだ。とりわけ彼らは教育の充実を図り、識字率を上げる努力を始めた。1870年から1880年代には戦後の混乱も収まり比較的安定していた南部諸州だが、1890年代に入ると、経済力を再び手にしたかつての奴隷主が政治的支配権を獲得し、アフリカ系アメリカ人に対する差別的隔離体制である「ジム・クロウ」体制の確立をみる。「ジム・クロウ」体制の下で、アフリカ系アメリカ人学校に対する予算は減額され、アフリカ系アメリカ人への暴力的行為も始まった。この時期に争われたのが1896年のブレッシー対ファーガソン裁判⁶⁾である。これは公共交通機関におけるアフリカ系アメリカ人と白人の分離をめぐる争われたものだが、これに対する連邦最高裁判所の判決によって、交通機関ばかりでなく生活のあらゆる場面において「分離すれども平等」(Separate but Equal)の原則が正当化されることになった。この判決により、教育の場においても、以後50年以上にわたって人種隔離が法的に認められることとなる。

教育における人種隔離に対する戦いは、「分離すれども平等」原則の下での平等化運動として、全国黒人向上協会(NAACP⁷⁾)主導で始まった。当初は、施設や設備のような目に見えるレベルでの平等化が複数の訴訟において争われたのだが、しだいに争点は、教育機関に対する評価や評判というような無形のレベルでの平等化へと移っていった。そして教師の質や学生間の知的交流といった目に見えない無形の要素についての平等が求められるようになるに至って、「分離すれども平等」という原理そのものが問われることとなり、ブラウン判決へと繋がっていく。1954年のブラウンⅠ判決⁸⁾では「公教育において分離すれども平等はありえず、分離された学校施設は本質的に不平等である」とされた。翌1955年の補足的なブラウンⅡ判決⁹⁾では、最高裁判所は各地の教育委員会に、人種差別的ではない方法で子どもを学校に割り振るような計画の策定を命じた。

このように、ブラウン判決は学校における人種隔離を違憲であると明確に裁定し、「人種統合」を命じたのだが、その結果は教育現場に直ちに反映されたわけではなく、南部諸州は当面この判決を無視した。さらに、ブラウンⅡ判決では判決の実行を「慎重な速度で」進めるように助言したため、南部諸州の動きは鈍かった。そのような中で起こったのが、アーカンソー州リトルロックにおける、アフリカ系アメリカ人生徒の白人学校への入学をめぐる騒動であった。1957年秋に9人のアフリカ系アメリカ人生徒が名門セントラル・ハイスクールに入学しようとした時、反対する白人たちによって暴動が起こされた。アイゼンハワー大統領は101空挺師団を投入し「人種統合」の実施と警護に当たさせたが、翌年には州知事によって同校は閉鎖されてしまう。このように遅々として進まない人種隔離撤廃が本格的な進展を見せるまでには、1964年の公民権法の成立を待たなくてはならなかった。

このような時期、すなわち 1960 年のニューオーリンズが、ルビー・ブリッジズの物語の舞台である。法的には教育現場での人種隔離は撤廃され「人種統合」が命じられてはいたものの、実質的にはいまだ学校での人種隔離は続いていたのが、当時の南部諸州の実状であった。次では「人種統合」をめぐるニューオーリンズの様子を見てみたい。

2.2 ニューオーリンズにおける「人種統合」の実施

1960 年当時のニューオーリンズはどのような状況にあったのであろうか。またルビー・ブリッジズがその渦中に巻き込まれた「人種統合」をめぐる騒動の経緯はいかなるものであったのか。それらを知るために、1968 年にロバート・L・クライン (Robert L. Crain) によって著された *The Politics of School Integration: Comparative Case Studies*¹⁰⁾ (『学校の人種統合に関する政策——比較的事例研究』) を紐解いてみたい。全米各地域や各都市における学校の「人種統合」について詳細に調査分析したこの書は、「ニューオーリンズの人種隔離撤廃」と題した第 3 部で、ニューオーリンズにおける「人種統合」の歴史や政策について詳察している。

1950 年代のニューオーリンズは全米第二の港を擁し、世界中からビジネスマンや観光客が集まる文化的でコスモポリタンな都市であった。また、人種混淆の長い歴史を持ち、人種による住み分けも目立っていなかった。したがって、人種隔離撤廃の実行が先延ばしにされていた南部において、ニューオーリンズが学校の「人種統合」の先鞭を着けるのではないかと思われていた。しかし、度重なる人種隔離撤廃の命令にもかかわらず、ニューオーリンズの教育委員会は人種隔離政策を変えようとはしなかった。ルイジアナ州議会も、人種統合に反対する法案を可決し、州知事は、公立学校を閉鎖してでも人種隔離政策を堅持すると明言した。クラインは、当時の報道によれば、白人の親たちの約 82% が、「人種統合」をするぐらいなら学校閉鎖を選択すると答えた、と記している。このような官民あげての抵抗に対して、連邦裁判所は、「人種統合」に反対する法案は違憲であるとして、1960 年 5 月までに人種隔離撤廃計画を提出するよう教育委員会に命じた。しかし、教育委員会は期日までに計画を立案することができず、結局「人種統合」は、1960 年 11 月 14 日の実施日に向けて連邦裁判所の主導で準備が進められることとなった。

準備として、まず「人種統合」される白人学校と、その学校に行くことになるアフリカ系アメリカ人生徒の選定がなされた。転学するアフリカ系アメリカ人生徒は、選定に当たって教育委員会は「客観的」で「機械的」な方法を用いるとしたが、それは彼らが選定の責任を逃れるための方便であったといえるであろう。アフリカ系アメリカ人生徒を選ぶにあたって、彼らは 4 段階の篩にかけられた。第 1 から第 3 の段階では、自宅と学校の距離、学業成績、家庭環境など比較的客観的判断の容易な要素が挙げられているものの、第 4 段階では、他人との摩擦状況における振る舞いなど、主観的判断を必要とする要素が並んでいる。このような過程を経て、129 人の候補者の中から 5 人のアフリカ系アメリカ人少女が選ばれ (後に 1 人は辞退)、その中のひとりがルビー・ブリッジズであった。

また、人種統合される学校の選定も、「客観的」とは言い難かった。少女たちの転学先を決定

するに当たって、アフリカ系アメリカ人生徒が授業に十分ついていくことができるように、第一学年の学業達成度テストの結果が低い学校が選ばれた。こうして選ばれたウィリアム・フランツ小学校とマクドノー第19番小学校の2校は、どちらも市の第九区にあったのだが、この地域は労働者階級の白人が暮らす、市内でも貧しい地域だった。そこはまた、アフリカ系アメリカ人の地位向上に対して敵対的な感情を抱く住人が多く住む地域でもあった。クラインはこの2校に関して、「最悪の選択」だったと記している。これら2校のうち、ルビー・ブリッジズはウィリアム・フランツ小学校に、他の3人の少女はマクドノー第19番小学校に転学することとなった。

2.3 ルビー・ブリッジズと彼女の転学をめぐる騒ぎ

こうしてルビー・ブリッジズは、1960年11月14日にニューオーリンズで初めて「人種統合」される生徒の一人として、ウィリアム・フランツ小学校の門をくぐった。しかし、事態は平穏には運ばず、反対派の白人による激しい抵抗運動が繰り広げられた。この間にルビー・ブリッジズの周りで起こったこと及びその後の展開、また彼女の生い立ちについて、ルビー・ブリッジズ本人が著した *Through My Eyes*¹¹⁾ (『私の目で見えたこと』) を参照しながらみていきたい。1999年に発表された *Through My Eyes* は、写真と文章がほぼ等分に配された大判の本で、小学校高学年以上を対象としたものである。騒動から約40年を経て著されたこの書で、ルビー・ブリッジズは冷静な目で当時を見つめ直している。また、関係者の多くの証言や当時の報道記事なども載せられており、「人種統合」を考える上で示唆に富む著作といえる。

ルビーは1954年9月にミシシッピ州タイラータウンで生まれた。両親はシェアクロッパーであった祖父母の農場で働いていたが、彼女が4歳の時、一家は職を求めてニューオーリンズに移り住む。父親はガソリンスタンドで働き、母親も時々パートタイムの仕事をして家計を助けていた。ルビーが両親や弟妹たちと暮らした家は、アフリカ系アメリカ人だけが住む地区にあり、白人の居住区と隣り合ってはいたが交流は全くなかった。ルビーは一家の長女として、教育熱心で信心深い母親に厳しく躾けられて育った。

1960年の夏、全国黒人向上協会 (NAACP) から知らせがあり、ルビーが白人学校に転学する生徒の1人に選ばれたことを告げられる。彼女に割り当てられたウィリアム・フランツ小学校は、当時彼女が幼児部に通っていたジョンソン・ロケット小学校より優良な学校とされており自宅からも近い、さらに、ルビーの白人学校への転学は、彼女の弟妹の将来にも良い影響を与える、と全国黒人向上協会 (NAACP) の人々は両親を説得にかかった。しかし、朝鮮戦争に従軍し、軍隊でのアフリカ系アメリカ人に対する差別を経験していた父親は、ルビーの転学に反対であった。彼は人種隔離主義者たちによる一家に対する暴力を恐れていたし、ルビーが平等に扱われることはまずないだろうと考えていた。一方母親は、一家に危害はおよばないと信じ、何より、ルビーにとって良い教育を受けることができるチャンスを逃すべきではないと考えた。この時点で、両親にはルビーがウィリアム・フランツ小学校に転学するただ一人のアフリカ系アメリカ人生徒であることは知らされていなかった。結局、母親の意見が通り、ルビーは秋からウィリアム・フ

ランツ小学校に通うことになる。

いよいよルビーがウィリアム・フランツ小学校に初めて出席する 1960 年 11 月 14 日の朝、ルビーの家には 4 人の U.S. マーシャル¹²⁾ が迎えにやって来た。ルビーと母親は彼らの車でウィリアム・フランツ小学校に到着したが、小学校の前の通りは怒りを露わにした群衆であふれていた。4 人の U.S. マーシャルに囲まれて校門に向かうルビーと母親に、彼らは罵声を浴びせ、物を投げつけた。しかし、ルビーは U.S. マーシャルに言われたように、わき目もふらずにただ前だけを向いて歩いた。ようやく校内に入ったルビーと母親は、校長室に直行させられる。その間、アフリカ系アメリカ人生徒が登校したことを知った白人生徒の親たちは次々と学校にやってきて、自分たちの子どもを家に連れ帰っていった。登校初日は、結局、ルビーと母親は校長室から一歩も出ないまま下校することとなった。帰りには、校門前には報道陣もつめかけ、群衆はますますふくれ上がっていた。その間をすり抜けてなんとか U.S. マーシャルの車にたどり着いたルビーと母親は、やっとの思いで帰宅することができた。この日のルビーの様子を、11 月 15 日付けのニューヨークタイムズ紙は「しっかり糊付けされた白いドレスを着て、髪に白いリボンをつけた少女は、母親の手をきつく握り、心配そうに群衆にちらっと目を向けた」と報じている。

翌日以降も、ルビーは U.S. マーシャルに守られて登校を続けたが、校内に他の生徒の姿はなかった。白人生徒がだれも登校しなくなった学校で、ルビーは北部出身の白人教師ヘンリー先生と 2 人だけの教室で授業を受けることになった。学校の前に集まる群衆の中には「チアリーダー」と呼ばれる母親たちの集団が毎日決まった時間に現れ、プラカードを振りかざし「人種統合」反対のシュプレヒコールを叫んでいた。このような反対派の様子はメディアを通じて連日報道されて、ニューオーリンズは全米の人々の注目を集めることとなる。そんな報道に関心を持ち、ルビーの姿や「チアリーダー」を一目見ようとウィリアム・フランツ小学校の門前にやってきた人々の中に、作家のジョン・スタインベックもいた。彼はその著 *Travels with Charley*¹³⁾（「チャーリーとの旅」）にこの時の様子を記している。スタインベックはとりわけ「チアリーダー」に嫌悪感を抱き、「これはもう母親ではなく、女性でさえない」と彼女たちを評した。

混乱は学校の門前だけではなく、ニューオーリンズの町全体に広がっていた。通りを走る車に石やレンガが投げられ、病院の救急診察室はけが人で満員になった。ホテルやデパートの売り上げは、大恐慌以来最悪となり、ニューオーリンズの経済は打撃を受けることとなった。ニューオーリンズでのこの騒動は、全米で最も暴力的で混乱した「人種統合」の一つに数えられている。

大混乱の 11 月が過ぎ、事態は少しずつ落ち着きをみせ始めていたが、門前には相変わらず「チアリーダー」の姿があった。白人の生徒も少しずつ戻り始めていたものの、教室や運動場の使用はアフリカ系アメリカ人生徒と白人生徒で厳格に分けられていたので、ルビーは学校で他の生徒を目にすることはなかった。校長に対する度重なるヘンリー先生の抗議の結果、学校に戻ってきた白人の生徒の中にはルビーの教室を訪れるものも出てきたが、アフリカ系アメリカ人と白人の生徒が同じ教室で授業を受けるようになるまでにはまだ時間を要した。ルビーの入学から 1 年が過ぎた 1961 年秋、2 年生になったルビーのクラスには 20 人ほどの白人生徒に混ざって数人

のアフリカ系アメリカ人生徒がみられた。ようやくウィリアム・フランツ小学校は「人種統合」されたのだった。しかし、大好きなヘンリー先生は東部に戻ってしまい、ルビーには淋しい新学期であった。

3. ルビー・ブリッジズをめぐる2つの作品

3.1 *The Story of Ruby Bridges* (『ルビー・ブリッジズの物語』)

母親の言いつけに従って気丈に通学し続けたルビーであったが、冬が訪れる頃には強いストレスが彼女の心身に影響するようになってきた。先に挙げた自伝的作品 *Through My Eyes* にはこの頃の様子が詳しく書かれている。ストレスはまず彼女の安眠を奪った。怖い夢をみて眠れないルビーに、母親はベッドに入る前にお祈りをするように諭す。このことについて、*Through My Eyes* では次のように記されている。

I would do as she said, and then I would sleep. Somehow it always worked. Kneeling at the side of my bed and talking to the Lord made everything okay. My mother and our pastor always said you have to pray for your enemies and people who do you wrong, and that's what I did¹⁴⁾.

私は母の言う通りにして、眠ろうとしました。どういうわけか、お祈りはいつも効き目がありました。ベッドのわきに跪いて神さまにお祈りすると、すべて上手くいきました。母と牧師さまは、人はその人の敵やその人に悪いことをする人々のために祈らなければならない、といつも言っていました。そして、私はそうしたのです。

さらに、ストレスはルビーから食欲をも奪った。学校でのランチタイム、食堂から白人生徒たちの賑やかな声や美味しそうな匂いが流れてくる中、ひとりきりの教室で食べるランチはルビーにとって苦痛であった。ヘンリー先生がそれに気づいてランチを共にしてくれるようになってから、母親が持たせてくれるサンドイッチを食べられるようになったものの、家ではポテトチップスとソーダ水のようなものしか口にしなくなっていた。

そんな時にルビーの前に現れたのが、白人の小児精神科医のロバート・コウルズであった。彼は1954年にコロンビア大学の医学部を卒業し、ハーバード大学の付属病院で研修した後、空軍に所属し、ニューオーリンズ近くに配属されていた。空軍にいらながらも、彼の関心は常に子どもに向いていた。ある日偶然ウィリアム・フランツ小学校の前でU.S. マーシャルに囲まれて通学するルビーを目にしたロバート・コウルズは、ルビーがどのようにしてこのような過酷な状況に耐えることでできているのか、関心を持った。彼はすぐに全国黒人向上協会 (NAACP) に援助を申し出て、ボランティアでルビーと彼女の家族を支えることになった。

ロバート・コウルズは毎週ルビーの家を訪れ、ルビーに絵を描かせたり彼女の話を聞いたりし

たのだが、時にはロバートの妻も同行し、家族ぐるみの付き合いとなっていた。家族以外に不安な気持ちを話せる大人がいること、そして特別に自分を気にかけてくれる人がいることは、大いにルビーの助けとなった。一方ロバート・コウルズにとっても、ルビーとの出会いは有意義なものであった。彼はルビーの事例について多くの論文を著し、それは後に *Children of Crisis: A Study of Courage and Fear*¹⁵⁾ (『危機に直面した子どもたち：勇気と恐怖の研究』) としてまとめられ、1973 年にピューリツァ賞を受賞している。

このロバート・コウルズが文を書き、1995 年に世に出た絵本が *The Story of Ruby Bridges* である。コレッタ・スコット・キング賞受賞者ジョージ・フォードが挿絵を描いたこの絵本は大いに人気を博した。次にこの絵本の内容をみてみたい。

見開き 26 ページ、13 枚の場面からなるこの絵本は、ルビー一家がニューオーリンズに転居する場面から始まる。ニューオーリンズの新居で、母親を中心に信心深く暮らすブリッジズ家の子どもたちの様子を示した後、次のページでは判事がルビーたち 4 人のアフリカ系アメリカ人少女に白人小学校への転学を命じる場面が描かれる。続くページでは、一家が教会で熱心に祈りを捧げている。この場面に添えられた文章は次のようなものである。

Ruby's parents were proud that their daughter had been chosen to take part in an important event in American history. They went to church.

"We sat there and prayed to God," Ruby's mother said, "that we'd all be strong and we'd have courage and we'd get through any trouble; and Ruby would be a good girl and she'd hold her head up high and be a credit to her own people and a credit to all the American people. We prayed long and we prayed hard."¹⁶⁾

ルビーの両親は、彼らの娘がアメリカの歴史に残る重要な出来事に加わるように選ばれたことを誇りに思っていました。

ルビーのお母さんは次のように言いました。「私たちは教会で神様にお祈りしました。私たちみんなが強くいられますように、そして勇気を持ってどんな困難も乗り越えることができますように。また、ルビーが立派な少女として、頭を高く上げ、私たち黒人とすべてのアメリカ人の誉れとなりますように。私たちは、長いあいだ熱心にお祈りしました」

次の 2 ページには、いずれもルビーの登校の様子が描かれている。プラカードを掲げ、大口を開けて罵りの言葉を発する白人男女の間を、ルビーは U. S. マーシャルに守られて校門に向かっていく。これらの場面では、大きな白いリボンをつけた彼女の姿は小さく描かれ、怒りを露わにした多くの白人たちの姿が画面の大半をしめている。それに続く 2 ページには、たくさんの机が並ぶ広い教室で二人きりで楽しそうに勉強するルビーとヘンリー先生の姿が描かれる。ここには、ヘンリー先生の次のような言葉が記されている。

“Sometimes I’d look at her and wonder how she did it, how she went by those mobs and sat here all by herself and yet seemed so relaxed and comfortable.”¹⁷⁾”

時々、私は彼女を見ていて、彼女はどのようにしてそんなふうにしていられるだろう、あのよう
な群衆のそばを歩いてここにたったひとりで座っているのに、こんなにくつろいで落ち着い
ているのはなぜだろうと、不思議に思いました。

これに続くページでは、ヘンリー先生がひとりで心配そうに教室の窓から外を眺めている様子、
そして次のページには、拳を振り上げ怒りくる大群衆に向かって、校門の前に立って小さく口
を開いて何やら話しかけているようなルビーの姿がみられる。添えられた文章には、事態がのみ
こめず群衆がルビーを殺すのではないかと心配するヘンリー先生をよそに、ルビーは何かを話し
終えると学校の中に入った、とある。次のページには、暴徒たちに何を話していたのかと問うヘ
ンリー先生に、「私は何も話していません。私はお祈りしていたんです。」と答えるルビーが描か
れる。実は、ルビーは毎朝学校の数ブロック手前で彼女に憎しみの言葉を投げかける人々のため
に祈りを捧げていたのだ。しかし、その朝は群衆の前にやって来るまでお祈りするのを忘れてい
たので、群衆を前にお祈りをしていたのだという。

そして、絵本の最後は、画面いっぱい、両手を組み合わせて天を仰いで祈るルビーの姿と、
彼女の次のような祈りの言葉で終わる。

Please, God, try to forgive those people.

Because even if they say those bad things,

They don’t know what they are doing.

So You could forgive them,

Just like You did those folks a long time ago

When they said terrible things about You¹⁸⁾.

神様、どうかあの人たちをおゆるしてください。

かれらはあのようなひどいことを言っているけど、

かれらには自分たちのしていることがわからないのですから。

ずっと昔に、人々があなたについて恐ろしいことを言ったとき、

あなたが人々をゆるされたように、どうかかれらをおゆるしてください。

この絵本を読み終わった時、読者の心には何が残るだろうか。逆境に負けず、固い意志と寛大
な心を持続けた強いルビー・ブリッジズの姿が、何よりも印象に残ることであろう。どの
ページをめくっても、弱いルビーは見当たらない。先にみたように、一時は眠ることも食べるこ
とも難しくなるほど苦しんだルビーであるのに、そのような姿をこの絵本からうかがうことはで
きない。作者のロバート・コウルズこそ、ルビーが重圧に押しつぶされそうになっていた時期を

支えた人物であるにもかかわらず、なぜ彼はルビーの辛さを作中に描き出さなかったのであろうか。まるで何の迷いも悩みもなく、ただ信仰心だけを頼りに、ルビーが困難な状況に対処したかのような描き方には疑問が残ると言えるであろう。

その疑問に答えるためのひとつのヒントを、アフリカ系アメリカ人の児童文学研究者 R. S. ビショップの論文¹⁹⁾の中に見出すことができる。ビショップの研究によれば、児童文学に登場するアフリカ系アメリカ人の主人公は強い少女が好まれる傾向があるという。アメリカ児童文学の世界では、1960年代の公民権運動の高まりを経験した後、1970年代に入ってアフリカ系アメリカ人作家によるアフリカ系アメリカ人を主人公にした児童文学が多く見られるようになった。確かにそこに登場する主人公の多くは「強い」女の子である。1995年に出版されたこの絵本においても、主人公であるルビー・ブリッジズは強くあらねばならないと考えられたのかもしれない。

さらに、弱さも含めたルビーの人間性全体を描こうとせず、彼女のイメージをある種のステレオタイプに閉じ込めたことは、アフリカ系アメリカ人対白人の図式を明確にしようとした結果であったとも考えられる。この絵本に描かれるルビーは強い少女であるとともに、けなげな少女でもある。罵倒されながらも「敵」のために懸命に祈る少女のイメージは、まさに「良い黒人」のイメージである。この絵本のクライマックスの場面に見られる、画面いっぱい描かれた大勢の「悪い白人」と小さな「良い黒人」の対比は、作品にたいへんドラマチックな効果を与えている。この絵本が出版された1990年代、アメリカ社会における人種構成や社会階層の変化はすでに進んでいたとはいえ、現在ほど混迷を深めてはいなかったように思われる。それは、「良い黒人」対「悪い白人」という単純化された図式が、まだかろうじて受け入れられる時代であったと言えるかもしれない。

3.2 *My Mother The Cheerleader* (『私の母はチアリーダー』)

ここまで見てきた絵本 *The Story of Ruby Bridges* で、ロバート・コウルズが描いた出来事を、ロバート・シャノウは、ティーンズ向けのフィクション *My Mother The Cheerleader* において、全く別の角度から切り取ってみせた。2007年に出版されたこの本は、白人のテレビプロデューサーでもあるロバート・シャノウの処女作だが、数々の賞に輝いた。物語の主人公ルイズは13歳の白人少女である。彼女は、小さな古びた安宿を営む母親とふたりで、ニューオーリンズの第九区で暮らしていた。物語は1960年冬の数日間の出来事を、ルイズが回想するかたちで進んでいく。

ルイズは、ウィリアム・フランツ小学校に通う成績優秀な少女であったが、11月にルビー・ブリッジズが入学して以来、母親に言いつけられて学校をボイコットしている。学校は休んでいるものの、宿の雑用を任されていたルイズは毎日忙しかった。母の経営する安宿は下宿屋も兼ねているのだが、使用人は年老いた料理番のアフリカ系アメリカ人女性シャーロットがひとりいるだけであった。宿にはほとんど寝たきりの老人も長期滞在しており、ルイズは彼の身の回りや排泄の世話までしなければならない。宿の常連客の多くはトラック運転手であったが、

街で評判の美貌の母親めあてにやって来る彼らがただの泊り客ではないことを、ルイズはうすうす感じていた。そのこともあって、ルイズと母親の関係は良好とは言えなかった。

11月以来、母親は毎朝着飾って、ウィリアム・フランツ小学校の門前に抗議に出かけていた。ルイズが小学校の前で目にしたのは、“Two, four, six, eight, We don’t want to integrate!”（「2、4、6、8、人種統合なんていらない！」）と、仲間と声をそろえて叫んでいる母親であった。彼女は「人種統合」に反対する「チアリーダー」の一員だったのだ。母親の様子は、作品の中で次のように描かれている。

... my mother was just one of the pack, a rank-and-file Cheerleader. ... I’d seen her throw eggs and tomatoes and cheer with the same intensity as the others²⁰⁾.

……私の母はヒラのチアリーダーで、一団の中の一人に過ぎなかった。……私は、彼女が卵やトマトを投げ、他の仲間と同じように激しく囃し立てる様子を目にした。

母親たちの一団やそれを取り巻く群衆が騒ぎ立てる中を、ルビー・ブリッジズが校門に向かってやってくる。その様子を見ながら、ルイズは次のように考える。

I was always amazed at how Ruby managed to maintain her composure. She never cried or even flinched. She just walked right into the school beside her bodyguards and didn’t give any indication that she heard or saw all the commotion swirling around her. How do you train yourself not to turn around when everyone’s screaming at you? May be she was partially deaf, I reasoned. At the time I wondered how and why she got picked to be the sole Negro student at our school. I assumed she must’ve been the unluckiest little Negro girl on the planet²¹⁾.

私は、ルビーはどうやって平静を保っていられるのだろうと、いつも驚いていた。彼女は決して泣かないし怯む様子もなかった。彼女は警護の人たちに囲まれてただまっすぐに学校に向かって歩き、周りの騒動を見たり聞いたりする様子を全くみせなかった。みんながあんたに向かって叫んでいるのに、あんたはどうして振り向かずいられるの？ たぶん彼女は耳がよく聞こえないんだと、私は思った。その時私は、なぜ彼女は私たちの学校にやってきたたった一人の黒人を選ばれたのだろうと、疑問に思った。彼女はきっと地球上で一番運の悪い黒人の女の子に違いないと私は思った。

ルビーの境遇をただ「運が悪い」と思うルイズ。そこには、憎しみも同情もみられない。ルイズはただ淡々とルビーをながめている。ルイズの中に、ルビーに対する加害者意識をうかがうことはできない。ルイズの母親にとってもそれは同様である。母親の目に、ルビーは自分たちの領分に入りこんできた侵入者としてしか映っていない。この母娘にとって、アフリカ系アメリカ人と白人が分離されていることは、善悪を問うまでもない、あまりに当たり前のことで

あった。作品中の次のような記述は興味深い。

Segregation was something everyone in our neighborhood just took for granted. If you had asked your average Ninth Warder at the time if there should be segregated schools, it wouldn't been like asking "Should the sky be blue?" In the Middle Ages everyone just assumed the world was flat—they didn't have any good reason to think otherwise.

... For my mother, the idea of sending a child into an integrated school was just as crazy as taking a walk off the edge of the flat Earth²²⁾.

人種隔離は、私の住む地区の人たちみんなが当然だと思っていることだった。もしあなたが、当時の第九区の普通の住人に、人種隔離された学校があるほうがよいかと尋ねたとしたら、それは「空は青いほうがよいか」と尋ねるようなものだっただろう。中世の人々はみな、世界は平らだとただ信じていた。それは、彼らがそれ以外に考える術を持たなかったからだ。……私の母にとって、子どもを「人種統合」された学校に送り出すという考えは、平らな地球の端を越えてその向こう側に歩いていくことと同じぐらい、まったく途方もないことだった。

しかし、このような母娘のもとに、その偏狭な考えを改めさせるような人物が登場する。それは、ある日宿泊者として東部からやってきた中年の白人男性、モーガンだった。雑誌ライターのモーガンは作家ジョン・スタインベックの友人という設定になっている。彼はスタインベックから勇気あるルビー・ブリッジズと醜悪な「チアリーダー」の話をきき、自分の目でそれを確かめたいとニューオーリンズにやってきたのだった。親切で魅力的なモーガンに、ルイズは夢中になってしまう。彼の話は、目の前の人種問題ばかりでなく、彼女のこれからの人生についても目を開かせるものであった。ルイズの母親もまたモーガンと意気投合するが、彼女は自分が「チアリーダー」の一員であることは言い出せないでいた。

翌日、ウィリアム・フランツ小学校の門前での騒動を見ようと出かけたモーガンだが、彼の乗ってきた東部ナンバーの車が群衆の目に止まり、怒りにかられた群衆の袋叩きに合う。モーガンは、東部から来た連邦政府の回し者と誤解されたのだった。しかし、反対派の怒りはそれだけでは収まらなかった。その夜、モーガンはリンチに遭い殺されてしまう。彼がすでに殺していることを知らないルイズは、一晩中モーガンを探しまわるが、万策尽きてシャーロットに助けを求める。アフリカ系アメリカ人の使用人シャーロットは、ルイズの生まれる前から母親のもとで働き、今では家族の一員のように暮らしていた。それだけに、シャーロットの次のような言葉は、ルイズには衝撃であった。

"I'm trying to save him."

"There're plenty of people that need saving who parade right in front of your eyes every day,

Louise. You ever think about those folks? I've known plenty of boys who's been lynched. You ever give them a thought? Ever think what it' like to be that little girl who's going to your school every day and having grown men throw bottles filled with piss at her? Have you ever really taken a look at what's going on over there at that school? That's what hell looks like, Louise. Hell right here in the Ninth Ward.²³⁾”

「私、彼を助けたいのよ」

「毎日あんたの目の前に列を作って助けを待っているたくさんの人がいるんだよ、ルイズ。あんたは、そんな人たちのことを考えたことがあるかい？ あたしはリンチに遭ったたくさんの男たちを知ってるさ。あんたは、その男たちのことを考えたことがあるかい？ 毎日あんたの学校に通って、大人たちから小便のいっぱい入った瓶を投げつけられているあの小さな女の子がどんな気持ちか考えたことがあるかい？ むこうのあの学校で何が起ってるか、ほんとうに見ようとしたことがあるかい？ あれは地獄そのものだよ、ルイズ。まさにこの第九区にある地獄なのさ」

いつもやさしく接してくれていたシャーロットの、厳しい言葉にルイズはたじろいだ。アフリカ系アメリカ人の近くに暮らしながら、ルイズは彼らの真の姿を見ようとはしてこなかったし、彼らの思いに気づこうとしなかった。ここでは、初めてそのことを自覚したルイズの姿を鮮明に描き出している。

一方、ルイズの母も、その晩は酷い目に遭っていた。モーガンを泊めたことで反対派の怒りを買って、彼女は家に押しかけてきたふたりの暴徒にレイプされてしまったのだ。それでも、翌朝、彼女は腫れ上がった顔をサングラスでかくしていつものように「チアリーダー」の列に並んだ。彼女は白人の母親たちから仲間外れにされることを何より恐れていた。ルイズはそんな母を遠巻きに見ている。次にあげるのはその場面である。

My mother didn't join in the chanting. She just stared, her eyes trained on Ruby Bridges as if she were really looking at her for the first time. Her gaze followed Ruby up the steps leading to the school, and then she turned back and scanned the howling protestors. Her eyes came to rest on me, standing on the outskirts of the crowd. We stared at each other for a long moment.

Finally she came over to me and took my hand, and we walked away.

And she never went back²⁴⁾.

母はシュプレヒコールに加わらなかった。彼女はただ目を凝らしており、彼女の視線は、まるで初めて目にするかのように、ルビー・ブリッジズの姿を追っていた。彼女は学校に続く階段を上っていくルビーをじっと見つめ、そしてそれから振り返って、大声でわめきながら抗議する群衆をざっと見渡した。彼女の視線は、群衆の端に立っていた私の上でとまった。

私たちは、長い間お互いに見つめ合っていた。

とうとう、彼女は私のところにやってきて私の手を取り、そして私たちは歩いてその場をはなれた。

そして、彼女は二度とそこには戻らなかった。

以上が *My Mother the Cheerleader* のあらすじである。ここに見てきたように、1960 年冬のニューオーリンズを舞台に、複雑な母娘の関係にルビー・ブリッジズをめぐる騒動を絡めて、物語は展開する。ここに描かれた数日のうちに、母と娘の葛藤は解決への道を見出し、ふたりの「人種統合」に対する認識も変化をみせる。様々な要素が盛り込まれた作品であるが、ここでは、ルビー・ブリッジズと「人種統合」の描き方に注目して考察を進めたい。

先にみたロバート・コウルズの絵本 *The Story of Ruby Bridges* が、ルビーをめぐる物語を、アフリカ系アメリカ人と白人の絶対的な対立の構図で描きだしたとするならば、この *My Mother the Cheerleader* は、ルビー・ブリッジズへの視線のあり方を通して、アフリカ系アメリカ人と白人の関係を相対化してみせたと言えるであろう。ルイズとその母親の視点、モーガンの視点、すなわちスタインベックの視点、その上にアフリカ系アメリカ人女性シャーロットの視点を重ねることで、ルビー・ブリッジズをめぐる物語を重層的で多面的なものにすることに成功している。ルビーの転学をめぐる顛末は、従来、加害者である白人と被害者であるアフリカ系アメリカ人という図式で描かれてきた。しかし、ロバート・シャノウは、その図式の上に、「人種統合」をめぐる白人間の争いも描き込むことで、新たな構図を示して見せた。一家が事件に巻き込まれ、自分たちが被害者になって初めて、ルイズと彼女の母親も、初めてルビーの悲しみや苦しみに気づくことができたのだった。

では、なぜこのような、アフリカ系アメリカ人と白人双方からの視点を併せ持ち、相対的な観点に立つ「人種統合」の物語が生まれ得たのだろうか。その背景を少し探してみたい。そこには近年のアメリカ社会の変化があるように思う。*My Mother the Cheerleader* が出版された 2007 年は、アメリカ社会において、すでに経済格差が広がり、人種のみならず、社会的階層も問題の焦点となってきた。「貧しいアフリカ系アメリカ人」対「豊かな白人」という単純な図式は、もはや通用しない時代になっていたと言えるだろう。この作品の中では、白人の主人公ルイズの家庭の貧しさや、彼女が暮らし、ウィリアム・フランツ小学校も位置するニューオーリンズ第九区の貧困が印象的に描かれている。このことにより、作者は、ルビーの転学をめぐる騒動の中に、「貧しい白人」によるアフリカ系アメリカ人に対する排斥行動という側面を浮かび上がらせようとしたのではないだろうか。このようにみると、まさに現代に繋がる問題がそこにあるように思われる。

さて、物語に戻って、「チアリーダー」の活動からは身をひいたルイズの母親であるが、この先、彼女の中に根強く残る差別意識に変化は起こるのであるだろうか。ルイズは、学校が再開されたとき、真のアフリカ系アメリカ人の友となれるのであろうか。真の意味での「人種統合」へ

の道はどのように開かれていくのか。最後にそれらの課題を考えながら、本稿の結びとしたい。

4. おわりに

2004年、ブラウン判決から50年の記念の年に、*Remember: The Journey to School Integration*²⁵⁾と題された写真集が、ノーベル文学賞作家トニ・モリスンによって著された。大判の写真集には、「人種統合」をめぐるさまざまな出来事や多くの人物の写真が、大小とりまぜて各ページに配置されている。これは、自由と公正を求めるアフリカ系アメリカ人の闘いを知らない世代に向けて出版されたものだが、年齢を問わずだれもが興味深くページを繰ることができる本である。写真に添えられたトニ・モリスンの文章が理解を助け、また読む者を深い考えにいざなう。序文にトニ・モリスンは次のような言葉を記している。

Remembering can be painful, even frightening. But it can also swell your heart and open your mind.

思い出すことは痛みをとめない、ときには怖いことかもしれません。でも、それはまた、あなたの胸を大きくふくらませ、あなたの心を解き放ってくれるかもしれません。

トニ・モリスンが言うように、ほんとうは何が起こったかを思い出すこと、そして、ほんとうに何が起こっているのかを知ること、それが真の「人種統合」への道ではないかと思われる。近年のアメリカ児童文学には「人種統合」をめぐる出来事を扱ったものが多く見られるようになった。作品は創作された時代の影響を受け、「人種統合」の描かれ方もさまざまである。しかし、どのような描き方をするにしても、事実を伝え続けること、それが児童文学に求められていることであろう。そして、伝え続けることこそが、足踏みしている「人種統合」の歩みを一歩でも前に進める力となるにちがいない。

註

- 1) Halley Potter and Kimberly Quick, "The Secret to School Integration", in *The New York Times*, Feb.23, 2016.
- 2) 本稿では、学校における人種統合を表す英語の integration に当たる語を「人種統合」と表記する。
- 3) 本稿では、絵本及びヤングアダルト作品も児童文学に含める。
- 4) Robert Coles, *The Story of Ruby Bridges*, New York: Scholastic, 1995.
- 5) Robert Sharenow, *My Mother the Cheerleader*, New York: Harper Collins, 2007.
- 6) *Plessy v. Ferguson*, 1896.
- 7) National Association for the Advancement of the Colored People、設立は1910年。
- 8) *Brown v. Board of Education of Topeka, Kansas (Brown I)*, 1954.

- 9) *Brown v. Board of Education of Topeka, Kansas (Brown II)*, 1955.
- 10) Robert L. Crain, *The Politics of School Integration: Comparative Case Studies*, Chicago: Aldine, 1968.
- 11) Ruby Bridges, *Through My Eyes*, New York: Scholastic, 1999.
- 12) 連邦裁判所の執行官
- 13) John Steinbeck, *Travels with Charley*, New York: Viking Press, 1962.
- 14) Ruby Bridges, *Through My Eyes*, 48.
- 15) Robert Coles, *Children of Crisis: A Study of Courage and Fear*, Boston: Little Brown, 1967.
- 16) Robert Coles, *The Story of Ruby Bridges*.
- 17) Ibid.
- 18) Ibid.
- 19) Rudine Sims Bishop, "Reflection on the Development of African American Children's Literature," in *Journal of Children's Literature* 38.2 (Fall 2012), 5-13.
- 20) Robert Sharenow, *My Mother the Cheerleader*, 135.
- 21) Ibid, 132-133.
- 22) Ibid. 148-149.
- 23) Ibid. 243.
- 24) Ibid. 286.
- 25) Toni Morrison, *Remember: The Journey to School Integration*, New York: Houghton Mifflin Co., 2004.

参考文献

- Bridges, Ruby *Through My Eyes*, New York: Scholastic, 1999.
- , *Ruby Bridges Goes to School: My True Story*, New York: Scholastic, 2003.
- Coles, Robert, illustrated by Ford, George, *The Story of Ruby Bridges*, New York: Scholastic, 1995.
- Crain, Robert L. *The Politics of School Integration: Comparative Case Studies*, Chicago: Aldine, 1968.
- 川島正樹『アメリカニズムと「人種」』名古屋大学出版会, 2005.
- ,『アフアーマティヴ・アクションの行方：過去と未来に向き合うアメリカ』名古屋大学出版会, 2014.
- Morrison, Toni *Remember: The Journey to School Integration*, New York: Houghton Mifflin Co., 2004.
- Ribke, Simone T. *Ruby Bridges*, New York: Scholastic, 2015.
- Rury, John L. and Hill, Shirley A. *The African American Struggle for Secondary Schooling 1940-1980: Closing the Graduation Gap*, New York: Teachers College Press, 2012. (倉石一郎・久原みな子・末木淳子訳『黒人ハイスクールの歴史社会学：アフリカ系アメリカ人の闘い 1940-1980』昭和堂, 2016.)
- Sherenow, Robert *My Mother the Cheerleader*, New York: Harper Collins, 2007.
- Steinbeck, John *Travels with Charley: In Search of America*, Viking Press, 1962.
- Weinberg, Meyer *A Chance to Learn: A History of Race and Education in the United States*, New York: Cambridge University Press, 1977.

